

論 文

漢字に対する意識と学習ストラテジー
—ニューヨークのある日本語クラスの学習者を中心に—

藤本陽子*1

キーワード：海外日本語学習者、漢字学習、漢字学習ストラテジー

はじめに

日本語は、漢字があるがゆえに多言語と比べ文字習得に長い期間を要する言語である。学習したにもかかわらず成人しても読めない、書けない漢字があり、常用漢字が定められていても成人しても異体字や常用漢字外の未知の漢字に遭遇することがある。日本にいると学校教育において中等、あるいは高等教育でも文字（漢字）を学習する機会があることに疑問は抱かないが、筆者自身は過去に、とあるインド人に「日本人はいつまで文字の勉強をしているのですか。」と半ば呆れたように言われ、表音文字だけの言語と比較して文字習得期間の異常な長さを認識させられた。漢字学習は、日本語にせよ国語にせよ避けては通れないものであるが、たしかに他の言語話者から見れば、言語学習が捗々しくなく目に映るものであろう。

実際、米国国務省 FSI (Foreign Service Institute) による英語話者の視点からの言語修得に要する時間で分類された言語のなかで、日本語は最も時間のかかるとされるカテゴリーIVのなかでもより難しい言語に認定されている。¹⁾ ちなみにこのカテゴリーIVには北京語も入っている。ここでは北京語と日本語の異なりを詳細に述べることは割愛するが、日本語がより難しいとされている要因には、言語体系が異なるほか、北京語より多い漢字の「読み」の種類の高さもあると考えられる。

このような長期間の文字学習が当然である日本において、筆者は、平成 17 年度の国立政策研究所教育課程研究センターが行った調査²⁾で明らかになった、高

校生の漢文嫌いの多さ (71.2%) をきっかけに、漢文嫌いの一因として考えられる漢字に問題はあるののではないかという推測に基づき、漢字への好悪、習得方法に焦点を当て調査を行ってきた。対象は、上記研究センターの調査時に高校生だった日本人大学生、中学生で外国につながる子ども (両親が移民であり本人も外国籍である、あるいは本人が外国で生まれ日本に移住した、あるいは一方の親が移民である)、筆者の調査当時の日本人高校生であり、それぞれ「漢文と漢字に対する意識の相関関係および漢字学習ストラテジー」(2016)、「漢文と漢字学習から見えるもの—外国につながる子どもたちの目線—」(2017)、「漢字、漢字学習ストラテジー、漢文学習—高校生を対象に行った調査から—」(2018) にまとめた。以後本稿にて大学生への調査の結果は「漢文と漢字に対する意識の相関関係および漢字学習ストラテジー」より、外国につながる子どもへの調査の結果は「漢文と漢字学習から見えるもの—外国につながる子どもたちの目線—」より、高校生の結果は漢字、漢字学習ストラテジー、漢文学習—高校生を対象に行った調査から—」よりとする。

3つの調査の結果、漢文嫌いに漢字に対する負の意識が影響していることが明らかになった。しかし、漢字単体に対して共通するのは、嫌悪感を抱いている者より、得手不得手に関わらず好感を抱いている者のほうが多いこと、「読み」より「書き」を不得手と考える傾向があることであった。³⁾但し、就学期途中で来日した外国につながる子どもは来日後 7 年経っても「読み」にも困難を覚えている。⁴⁾一方、漢字を記憶

*1 至誠館大学 ライフデザイン学部

するためのストラテジーは、大学生は「何度も書く」⁹⁾、高校生は「自然に覚える」⁶⁾、外国につながる子どもは「何度も書く」と「環境から覚える」⁷⁾が最も多く対象によって異なりが見られている。

そのなかで既出の「漢文と漢字学習から見えるもの—外国につながる子どもたちの目線—」(2017)において、漢字について日本で就学する外国につながる子ども達(非漢字圏)への調査から、日本での就学期間の長短が、特に「読み」への得手不得手に影響していることが明らかになっている。

本稿ではアメリカ合衆国ニューヨーク州ニューヨーク市内マンハッタンにある私立学校で外国語として日本語を学習する子ども達の漢字に対する意識や学習方法などを取りあげる。そして彼らも、日本語の文字習得(特に漢字)に対して同様の意識を持つのか、漢字学習ストラテジーは同様なのか、漢字学習の得手不得手とストラテジーの相関関係を検証したい。さらに、必要に応じて筆者が行った前出3稿のデータとの比較、とくに日本における外国につながる子どもの一部は日本語が母国語ではないという立場から共通性があるのかを探りたい。また特に就学期途中から来日した外国につながる子どもが抱える先述の問題を解決する糸口があるかも探りたい。

調査時期および調査方法

本調査は2015年10月に行った。アンケート方式で、他の調査と比較するために質問事項は同様のものを英語に翻訳して行った。筆者が現地で実施することができなかつたため、現地の日本語クラス担当教員の協力を得てGoogleFormを利用した。

このGoogleFormの良いところは、オンラインで回答するので用紙が不要なこと、現地の教員が用紙を配布回収、筆者への送付をする必要がないこと、回答者が必須の質問に回答しなければ次の質問に答えられないように設定できるので回答漏れがないこと、また回答によって不要な質問を省略できること、さらにスプ

レッドシート、グラフ、および個別回答という3種類の体裁で集計が自動的に行われることである。

調査対象

本調査の対象は、先にも述べたようにマンハッタンにある私立学校の日本語クラスで学習する生徒で人数は27名である。日本語はカレッジボードが指定するAP(Advanced Placement)に入っており、中等教育で日本語を選択し学習する者がいるのである。¹²⁾このクラス担当教員によると、1時限が45分のクラスで週5日毎日あり、クラス分けはレベルのほか子ども自身の時間割によるという。クラスの内訳は男子3名に対し女子が24名で、女子が圧倒的に多い。年齢層は14歳~17歳だが、14、15、17歳は各2名で21名の16歳が大勢を占めている。日本語学習歴は概算で回答した生徒と詳細に回答した子どもがいるため一覧にしないが、概算で3年が12名、ついで2年が11名で最も多く、1年、14年、日本で生まれた、7年が各1名となっている。学習歴2、3年の人数が多いが、次の図1から母語話者から初心者までレベルは様々であることが窺える。

子どもの第一言語については図1のとおりである。

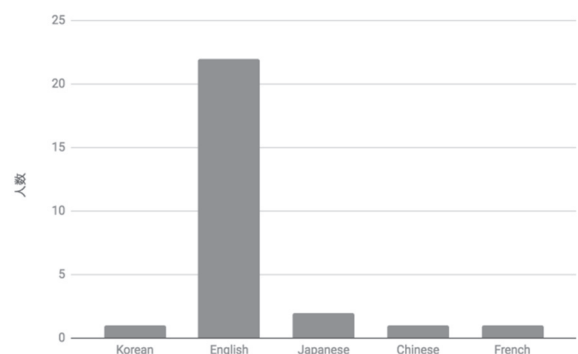


図1 生徒の第一言語

左側から、韓国語、英語、日本語、中国語、フランス語となっている。

第一言語で最も多いのは当然のことながら英語で22名、ついで日本語2名、韓国語、中国語、フラン

ス語が各1名となっている。漢字圏の生徒は3名である。この3名を含め英語を第一言語に挙げなかった生徒達は、米国以外で生まれいずれかの時期に渡米した生徒達であろう。

なお、日本語学習歴14年と回答した生徒は学習歴と同年の14歳であるが、日本語を第一言語として挙げず第二言語に挙げている。家庭では日本語を使う機会はあるものの、英語のほうが優位だということであろう。アメリカで生まれたか、あるいは早い時期にアメリカに移ったと考えられる。一方、日本で生まれたと回答した子どもで日本語を第一言語として挙げた者、また学習歴1年と回答した子どものなかの1名で日本語を第一言語に挙げている子どもがいたが、この2名の場合は就学期途中でアメリカに移り、第一言語である日本語が未だ優位である状態であると考えられる。自分のルーツである国の言語を維持するためか、あるいは自分が得意とする言語を学校の語学の科目から選択したのであろう。

学習者の第二言語は図2のとおりである。

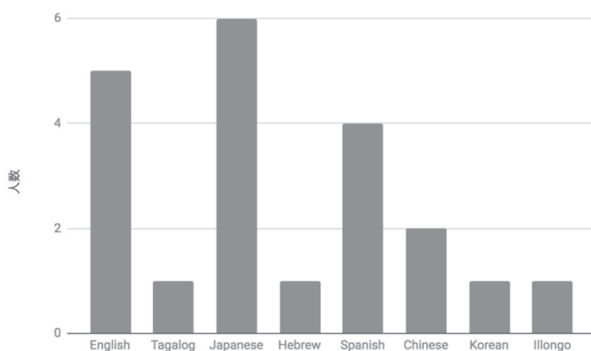


図2 生徒の第二言語

左側から、英語、タガログ（タガログという語には言語の意味が入っているので、あえてタガログ語とは表記しない）、日本語、ヘブライ語、スペイン語、中国語、韓国語、イロンゴとなっている。

第二言語については21名の回答があった。第一言語に英語以外を挙げた生徒5名はすべて英語と回答している。日本語のクラスなので日本語を第二言語に挙

げた子ども数が最も多い6名となったが、第二言語がないということでこの質問に対して回答のなかった6名は日本語を第二言語に挙げていない。この子ども達は、日本語の学習歴について2~3年と回答している子ども達である。一方、日本語を第二言語として挙げた子ども達にも学習歴2~3年はおり、この学習年数が本人が自分の言語の一つとして認識する境界になりそうである。

一方、第二言語にも日本語を挙げなかった子ども達の詳細は、図2にあるタガログ、ヘブライ語、スペイン語、中国語、韓国語、イロンゴとなるが、この子ども達は2~3年の学習歴がある日本語より優位な言語を持っているということであり、ニューヨークという場所ゆえに外国にルーツをもつ子どもが多いことから、教育課程で学習している外国語というよりは自身の第二言語という位置づけの子どもが主であると考えられる。

第三言語については9名の回答があったが、そのなかで日本語を挙げたのが5名であった。第一言語に韓国語を挙げた子ども1名、第二言語にスペイン語を挙げた子ども2名、第二言語に韓国語を挙げた子ども1名、第二言語にイロンゴを挙げた子ども1名である。最後の第二言語にイロンゴを挙げた子どもは回答で「日本語？」と最後に？をつけており、自分の言語として日本語にまだ自信がない様子が見られた。また、14年間日本語を学習していると回答していた子どもは第三言語にスペイン語を挙げ、1年日本語を学習していて第一言語に日本語を挙げた子どもは第三言語に韓国語を挙げている。ちなみに、第三言語にも日本語を挙げなかった子どもは、古典英語（第二言語にヘブライ語）、フランス語（第二言語にスペイン語）を挙げている。

英語を第一言語に挙げ第二言語以下回答しなかった子どももいるが、第二、第三言語の多様性と個人の多言語性の様子が見て取れる。

質問事項

質問内容は以下である。

1. 日本語で使用する文字のなかで好きなもの (ひらがな、カタカナ、漢字、絵文字、なし、から複数選択)
2. 日本語の文字で書くのが得意なもの (ひらがな、カタカナ、漢字、絵文字、なし、から複数選択)
3. より頻繁に使用する文字 (ひらがな、カタカナ、漢字、絵文字、から複数選択)
4. 漢字が好きか (日本語を学び始めてからずっと好き、漢字は得意で好き、漢字は得意ではないが好き、昔は好きではなかった、昔は好きだった、漢字は学び始めてからずっと嫌い、漢字は得意だが好きではない、漢字は得意ではないから好きではない、から一つ回答) また、途中で好きあるいは好きではなくなったと回答した者にはいつからか。
5. 漢字を書くのが得意か (得意 (辞書なしで書ける)、まあまあ得意 (時々辞書が必要になったり、誰かに聞くことがあるが大丈夫)、あまり得意ではない (ひらがなで書くほうがよい)、全く得意ではない (できるかぎりひらがなで書く) から一つ回答)
6. 漢字を書くのが得意か (適切な漢字をスマホや PC の同音語のリストから選べる、選べるという自信がない、から一つ回答)
7. 漢字を読むのが得意か (漢字を読むのが得意 (辞書なしで或いは誰にも聞かずに読める、まあまあ得意 (時々辞書が必要或いは誰かに聞くこともあるが、ストレスはない)、あまり得意ではない (できれば漢字は飛ばして読みたい)、全く得意ではない (できる限り読みたい)、から一つ回答)
8. 漢字の読みを覚えるのが得意か (得意 (すぐに覚える)、まあまあ得意 (練習をすれば覚えらる)、あまり得意ではない (覚えるのに時間がかかる)、全く得意ではない (時間をかけても覚え

られない) から一つ)

9. 漢字の形を覚えるのが得意か (得意 (すぐに覚える)、まあまあ得意 (練習をすれば覚えらる)、あまり得意ではない (覚えるのに時間がかかる)、全く得意ではない (時間をかけても覚えられない) から一つ)
10. 漢字の覚え方 (漢字をバラバラのパーツに分けて覚える、漢字を偏と旁に分けて覚える、音読みは旁から推測して覚える、漢字を覚えるまで書く、書道クラスで学んでいる、本や新聞などから自然に漢字の形を覚える、本や新聞を読むことで自然に読みを覚える、から複数選択)
11. 初めて遭遇すると思われる常用漢字外の漢字 2 つから読みを問う質問 (偏と旁からなるもの、部首のみのもの)
12. 新しい漢字に遭遇したときにどうするか (印刷媒体の辞書をひく、電子媒体の辞書をひく、知っているような人に聞く、インターネットで調べる、スマホのアプリで調べる、何もしない、から複数選択)

調査結果および考察

What is your favorite Japanese letter?

27 responses

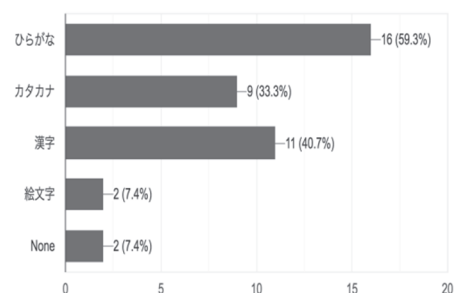


図3 日本語で使用する文字の中で好きなもの

上記図3は日本語で使用する文字のなかで好きなものについて質問した結果である。縦軸は文字の種類、横軸は回答者数を示している。複数回答を可能とした

ので回答数は回答者数より多く 40 となっている。見て分かる通り日本語で使用する文字のなかではひらがなが圧倒的に好まれており、漢字がカタカナを上回っている。カタカナは外来語を表記するために使われるが、外来語がむしろ外国人には分かりにくいこと、またカタカナを使用する機会はひらがなに比べると少ないことによると思われる。

Japanese letter which you are good at writing
27 responses

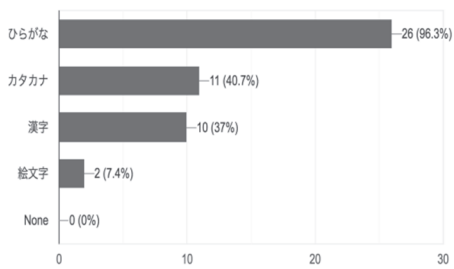


図4 日本語の文字で書くのが得意なもの

図4は、好きな文字と得意な文字の違いを明らかにするために質問した結果である。縦軸、横軸は図4と同じである。複数回答を可能としたので回答数は49となっている。日本語の文字で書くのが得意なものについて改めて尋ねた。「書き」が得意なものがないという回答はなく肯定的な結果となったが、ひらがなについては26とほぼ全員が得意と回答しているのに対し、カタカナ、漢字については半数以下となった。また、質問2の好きな文字に対する回答と、質問3の得意な文字ではカタカナと漢字の数が逆転しており、好きな文字と得意な文字は一致しないことが分かる。

Japanese letter which you use more often
27 responses

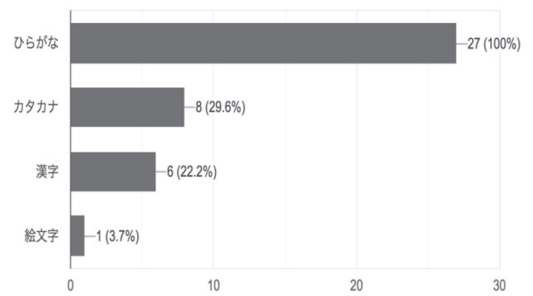


図5 より頻繁に使用する文字

図5は、文字のなかでより頻繁に使用するものに対する回答である。これはその文字種への好悪や得手不得手とは別に、子ども達が何を使用するのかを質問した結果である。縦軸、横軸は図4および5と同様である。複数回答を可能としたので、回答数は42となっている。ひらがなについては全員が選択した。ひらがななくして記述できず、カタカナは代替できないということである。カタカナ、漢字は得意なものより減っている。漢字については、好きな文字の半分となっており、好感度と使用頻度の関係はないことが分かる。

Do you like Kanji?

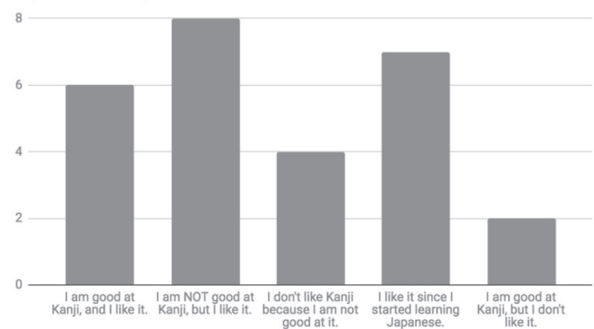


図6 漢字の得手不得手と好き嫌いの関係

図6は漢字が好きかどうかを得手不得手と合わせた直接的な質問に対する回答である。縦軸が人数、横軸は左から「漢字は得意で好き」、「漢字は得意ではないが好き」、「漢字は得意ではないから好きではない」、「日本語を学び始めてからずっと好き」、「漢字は得意

だが好きではない」となっている。回答のなかった選択肢は省いている。回答数は 27 で、漢字に対する得手不得手に関わらず漢字が好きという回答は 3 つ合わせて 21 となっている。4 種類の文字から選択する際には全体の半数以下だった漢字だが、漢字だけを取り上げて質問すると漢字が好まれていることが分かる。ちなみに、好悪が途中で変わったという回答がなかったため、上記質問 4 の追加の質問に対する回答はなかった。

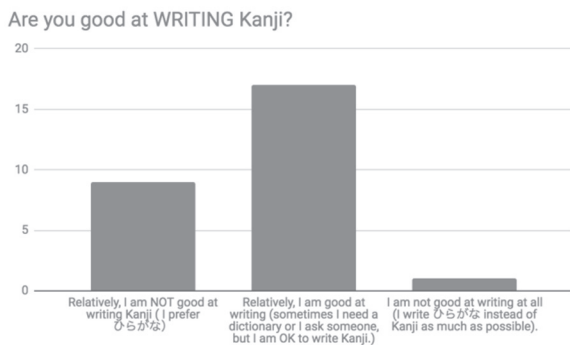


図 7 漢字を書くのが得意か

漢字の「書き」を取り上げ得手不得手を尋ねた結果が図 7 になる。縦軸が人数、横軸は左から「あまり得意ではない (ひらがなで書くほうがよい)」、「まあまあ得意 (時々辞書が必要になったり、誰かに聞くことがあるが大丈夫)」、「全く得意ではない (できるかぎりひらがなで書く)」の 3 つとなっている。「得意 (辞書なしで書ける)」という回答はなかったため省いている。一番多かったのは「まあまあ得意」で 17 名、「あまり得意ではない」が 9 名、「全く得意ではない」が 1 名で、図 6 で挙げた「漢字の得手不得手と好き嫌いとの関係」とは合致しない。

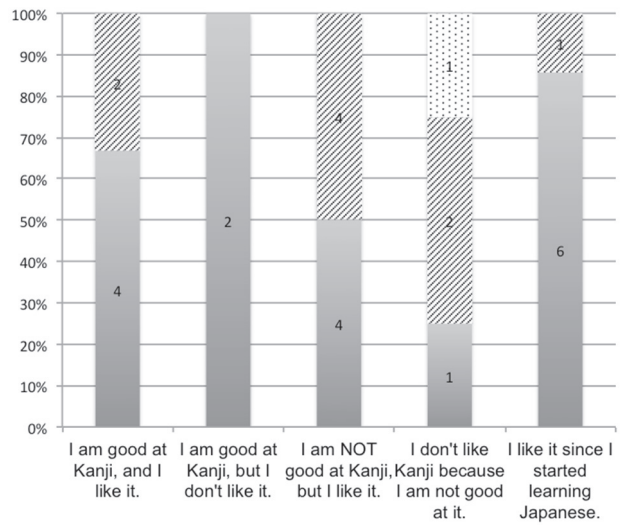


図 8 漢字への好悪と得手不得手の関係および「書き」の得手不得手

図 8 は図 6 と図 7 を合わせ、漢字への好悪と得手不得手のなかで、書きに対する得手不得手の数を表している。横軸は左から「漢字が得意で好き」、「漢字は得意だが好きではない」、「漢字は得意ではないが好き」、「漢字は得意ではないので好きではない」、「漢字は学び始めてからずっと好き」であり、棒グラフの中の点で示しているところは「漢字の書きは全く得意ではない」、斜線は「漢字の書きはあまり得意ではない」、塗りつぶしてあるものは「漢字の書きはまあまあ得意」である。中にある数字は実際の回答の数字である。

「漢字が得意で好き」と回答した子どもでも、書きについて取り上げると「まあまあ」であることが分かる。また、同様に「漢字が得意 (だが嫌い)」と回答した子どもも書きについては「まあまあ」であり、書きの得手不得手は漢字全般の得手不得手とは直接的には関係しないと考えられる。一方、「漢字が得意ではないから好きではない」と回答した子どもは書きがあまり得意ではないと回答している。

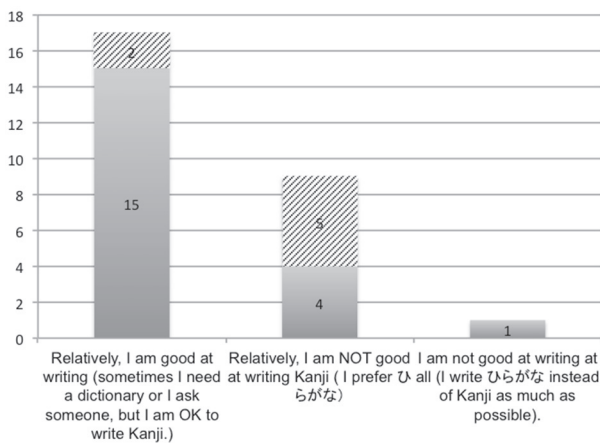


図9 漢字の「書き」の得手不得手と同音異義語からの適切な漢字の選択

図9は、漢字の「書き」の得手不得手を、同音の漢字群から適切な漢字が選択できる、できない数で分けたものである。横軸左から、「漢字を書くのはまあまあ得意（時々辞書が必要になることもあり、誰かに聞くこともあるが大丈夫）」、「漢字を書くのはあまり得意ではない（ひらがなで書くほうがよい）」、「漢字を書くのは全く得意ではない（できるかぎりひらがなで書く）」となっている。「漢字を書くのは得意」と書いた回答者はいなかった。「同音の漢字群から適切な漢字が選択できるか」という質問には、漢字の書きについての一部として行い、選択肢は二つ用意した。即ちすでに述べたように、「スマホやPCなどの同音の漢字群から適切な漢字を選ぶのに自信がない」（棒グラフ内上部斜線部）、「スマホ、PCなどの同音の漢字群から適切な漢字が選べる」（棒グラフ内下部無地部）である。ちなみに「自信がない」という回答は7で、「選べる」という回答は20であり「自信がない」のほぼ3倍となっている。

漢字を書くのがまあまあ得意な者のほとんどは同音漢字群からの選択には自信があるが、あまり得意ではない者は同音異義語選択への自信の有無が拮抗している。漢字の「書き」に対する得手の要因に同音語から選べる自信があることがあると考えられる。しかし、漢字が苦手な者でも選択に自信を持っており、漢字の

「書き」の不得手と同音語選択の自信のなさには直接的な関係はないと考えられる。

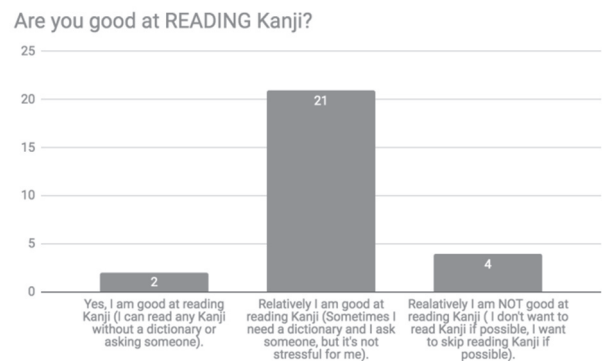


図10 漢字の「読み」の得手不得手

図10は漢字の読みに対する得手不得手である。左から「漢字の読みは得意」、「まあまあ得意」、「あまり得意ではない」の3つとなっている。選択肢はこの他に「全く得意ではない」があったが、回答者はいなかったため省略している。「まあまあ得意」が最も多いものの、書きにはいなかった「得意」という回答もあり、合わせて85%以上がポジティブな回答である。さらに「全く得意ではない」という者がおらず、書きに比べて「読み」は易しいと考えられていることが分かる。

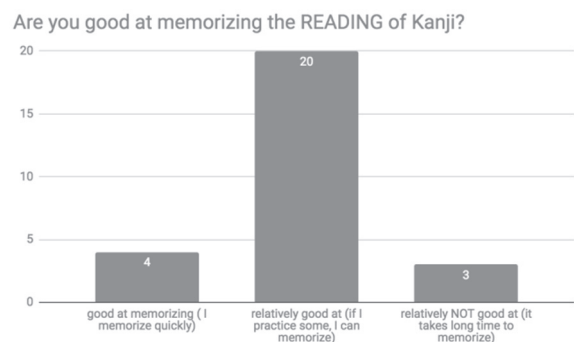


図11-1 漢字の読みの記憶の得手不得手

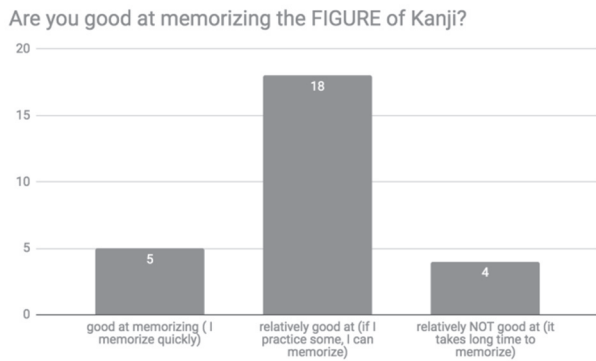


図 11-2 漢字の形の記憶の得手不得手

図 11-1 および 2 は、漢字の「読み」と「書き」に関する記憶の要素となり得るものに対する得手不得手である。左から「得意」、「まあまあ得意」、「まあまあ不得手」という回答になっている。どちらも「まあまあ」という回答が最も多く、「不得手である」という回答はなかった。

なお個別の回答を見ると、両方が「まあまあ得意」と回答した者が 14 名だった。つまり上の図 12-1 と 2 にある 20 名と 18 名のうち 14 名が両方に「まあまあ得意」として自己評価していることになる。「読みの記憶がまあまあ不得手」として回答した者と「形の記憶がまあまあ不得手」として回答した者は異なっており、図 12-1 および 2 の 3 名と 4 名の回答者は異なっている。一方で両方とも得手という者は 3 名おり、3 名とも漢字が得手と回答した者だった（ただしうち 1 名は漢字は好きではないと回答している）。

「読み」と「形の記憶」が得意であれば漢字が得意であると自認することになる。しかしそれは絶対ではなく、どちらかあるいは両方が「まあまあ得意」であっても漢字は得意であると自認する。そしてどちらかが「まあまあ得意ではない」となると、漢字を得意とは自認しない。

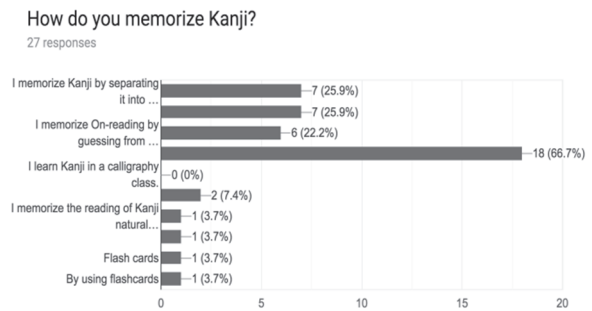


図 12 漢字の記憶の仕方

図 12 は漢字の記憶の仕方についての回答である。複数回答と記述での回答を設けたものである。文字が多くスペースが足りないため縦軸の項目が見えなくなっているが、上から「漢字をバラバラにして覚える」、「漢字を偏と旁に分けて覚える」、「音読みは音を含む部分から推測して覚える」、「覚えるまで何度も書く」、「書道の教室で学ぶ」、「漢字の形は本や新聞などから自然に覚える」、「漢字の読みは本や新聞などから自然に覚える」、下から 3 番目が「少し絵で」、以下 2 つが「フラッシュカード」となっている。記述式だったためフラッシュカードに関する記述の異なりで回答が 2 つに分かれているが、フラッシュカードを利用しているという回答は合わせて 2 になる。

書道教室という回答は一つもなかった。これは『習字で習う』は選択肢した者が一人もいなかったため表から省いた⁷⁾等筆者が調査を行ってきたその他の日本国内の回答者からも一つもなかった。最も多かったのは「覚えるまで何度も書く」の 18 で、およそ 67% が採っている方法である。そのうち 10 名が漢字を覚えるのにこの方法だけを採っていると回答している。その次に多かったのは漢字を分解して記憶する方法 2 種類で同数だが、詳細を見るとバラバラにする方法だけを採っているという回答が 4 で、偏と旁に分ける方法だけを採っているという回答が 3、両方が 3 となっている。特筆すべきは「音読みは音を含む部分から自然に覚える」、つまり傍の部分を意識しなけ

ればできない方法を選んだ回答者が、偏と旁に分ける方法は選んでいなかったことである。

次は、実際に未知の漢字に遭遇したときにどのように「読み」や意味を推測するのかを検証した結果を述べる。漢字は学習の機会がなくとも漢字に対する知識で「読み」や「意味」を推測することが可能な場合がある。その知識を有しているか、あるいはその知識を利用することができるかを検証している。

そのために偏と旁に分けられる漢字1つと分けられない象形文字1つのどちらも常用漢字外の漢字を選んだ。特に海外では学習あるいは日常で遭遇する可能性は限りなく低い。

1つ目の漢字は「潤」(カン...山の間川の意)である。この漢字は偏と旁に分解することができ、旁から「読み」を推測することが可能である。また、正解は導き出せないとしても、偏と旁(あるいはパーツ)から意味を推測するのが困難ではない。回答は記述式で無回答も可としたため、回答は12となった。12の回答のうち3つが「分からない」であり、「カン」と読めた回答は一つもなかった。

実際に挙げられた読みとしては、「Junn (じゅん)」、「Shi of katakana and the kanji of between (カタカナのシと間の漢字)」、「Water & gate & eye (水と門と目)」、「Small gate (小さな門)」、「Mon (もん)」、「Mizuumi (みずうみ)」、「Oaida (おあいだ)」、「Sea port (港)」、「IRAANDO (アイランドを日本語発音でローマ字で表記したと思われる)」であった。

「じゅん」と回答したのは14年間日本語を学んでいるが日本語が第二言語だという回答者で、「じゅん」と読むと回答した理由として「I've seen a Japanese persons name that had this kanji in it I think, and his name was junn (ママ) (この漢字を使った名前を持つ日本人を見たことがあり、その人の名前がじゅんと言ったから)」というものである。この「じゅん」という読み方は、筆者(2016,2017)の日本人学生や日本にいる外国につながる

子どもからも出てきた回答で、理由はやはり芸能人の名前の漢字「潤」と混同しているものであった。この回答者が日本事情に通じていることが改めて分かる。意味については「Something to do with water (水に関するもの)」、その理由を「The left side of the kanji means water (左側の漢字が水を意味する)」と回答しており、偏からのみ意味を推測し、漢字全体の意味は推測できていない。

「カタカナのシと間の漢字」、「水と門と目」という回答は、漢字の読みではなく漢字をバラバラにした回答である。シをカタカナのシと答えた理由として、「Because I learned those parts in class (このパーツをクラスで習ったから)」と記述しており「さんずい」という名前を教えられず、カタカナのシと同様のものとして教えられたからであろう。しかしこの漢字の意味については「In between water (水の間)」と回答しており、カタカナのシの形の意味するものが水に関するものであること、間が「あいだ」を意味することを理解していることが分かる。漢字を正確に偏と旁に分ける技術は持っているが、傍の音読みによって漢字の読みになることまでは知らなかったと考えられる。

また「水と門と目」という回答者は、「They all have the particles I can recognize (自分が分かるパーツが水と門と目)」と記述し、漢字を分かるパーツにしてみるという努力が見られる。意味については「Water dam? (ダム?)」、理由として「Water + gate (ママ) (水と門)」と回答しており、本人が漢字を分解したときの目は無視して水と門からダムと推測したことが分かる。「小さな門」の回答者は理由を書きつけていなかったが、実際の日本語の読みが分からないため読みではなく意味を回答したのであろう。意味についての回答も「小さな門」でその理由についての記述はなかった。門構えだけで判断したと考えられる。

一方「港」については「Because the first kanji is in sea and the other kanji is means gate (ママ) (一つ目の漢字は海の中でもう一つは門を表すから)」と意味の記述を読み

の回答に変えている。ちなみに意味については「I do not know (分からない)」、また理由については「I haven't learn this kanji yet (ママ) (まだ習っていない)」と回答している。

「もん」の回答者は「The right side is shitsumon no mon, and it means gate/space. The left side, radical, has to do with water (右側は質問の間で意味は門あるいは空間。左側は根本的に水に関係ある)」と記述している。この回答者は間と門と間の意味の違いを理解しながら、右側を間ではなく間と認識し、読みの違いは分からなかったと考えられる。意味は「Slowly? Or water side or sometging (ママ) (ゆっくり? または水辺か何か)」、「The left is water and the right side means space. I think of water or water space/side (左側は水で右側は空間を表す。水か水の空間または水辺だと思う)」と読みに対する回答を改めてしているが、漢字の分析は正しく行っていることが窺える。

「みずうみ」、「おあいだ」は漢字の偏や旁から読み方を推測したものであろう。「みずうみ」の読みの理由についての回答はなかったが、意味については「Lake (湖)」、理由は「The kanji contains aida and the radical of water (この漢字は間と水体から成っている)」と回答しており、漢字のパーツのもつ意味から湖という言葉を引き出しており、また漢字の分析は正しく行っていることが分かる。

「おあいだ」の回答者は「I think that this might be the reading because the kanji to the right in it is the kanji for gate or between and the kanji to the left is part of the kanji for 'to swim' which starts with o~ (漢字の右側は門や間を表し、左側は「泳ぐ」の左側と同じでお~始まる言葉だと思うから。)」と記述している。つまり左側の彳は泳ぐの一部の「お」と読む部分だと理解しており、それに右側の「あいだ」を合わせて「おあいだ」と読むと推測したということなのである。意味に関しては「Between land and sea (陸と海の間)」、その理由として「Think think that this is the kanji's meaning because it has the kanji for between

and a part of a kanji used for the ocean and swimming kanjis (ママ) (間と、海や泳ぐの漢字の一部でできているのでこの漢字の意味はそうなる)」と回答している。彳に対する理解がネックとはなっているが、この子どもも漢字の成り立ちは理解していることが分かる。

「IRRANDO」の回答者は、「The left radical means water (or a body of water), the right side means in between, so it would mean in the middle of the sea, which makes me think of an island (左側は根本的に水 (または水体) を意味し、右側は間を意味する。だから海の真ん中の意味となり、島だと思う)」、意味は島であり理由は読みの理由と同じであると回答している。この子どもも、彳と間で漢字が構成されていることを理解していることが分かる。

以上、読みについて回答のあったものを詳しく見てきたが、正しい読みはなかったものの、子どもが漢字の構成を学んでおり、分析推測できることが分かった。また、読みに対しては回答しなかった回答者のうち3名が意味について回答しており、1名が「Water gate? (水門?)」(理由なし)、もう一名が「Hear (聞く)」、理由として「The kanji has a familiar kanji in it (知っている漢字が入っている)」、もう1名が「Between (間)」、理由は「The kanji on the right means between and the kanji on the right is water but I cannot tell what the entire kanji means (ママ) (右側の漢字は間を意味しており、左側は水だが、漢字全体としてはどういう意味か分からない)」と回答している。このように、未知の漢字に対して「読み」より意味を推測する方が子どもにとって容易でありそうであり、また子どもが漢字を表意文字でもあることを理解していることが分かる。

なおお旁に関しては門、間、間、聞、閨など門構えの漢字との形や意味の混同が見られた。

2つ目の漢字は「ㄣ」(チュ...燈火のじつととまって燃えた姿を描いた象形文字)である。これは一画の漢字なので分解することはできない。これも回答を自由にしたので「分からない」を含めて回答は12となり、そのうち「分からない」が4となってい

る。それ以外は「It that a comma..... (コンマでは)」、「Comma (コンマ)」、「Kami (髪)」、「That's a good question (良い質問です)」、「Sui (すい)」、「Noichi (のいち)」、「No (いいえ)」、「It doesn't have a sound (音がない)」である。上述の「潤」のときと同様、そう回答した理由とこの漢字の意味について問うた結果が次のようになる。

まず「コンマでは」あるいは「コンマ」、「音がない」と回答した者は、「It looks like a comma (コンマに見える)」あるいは「Comma! (コンマ!)」、「Commas don't have sounds! They are literal temporary pauses. (コンマには音がない! 文字上一時的に休止するもの)」と記述したうえで、意味については1名は回答がなく、もう1名は「To stepper ate or show a pause (ママ) (休止を表す)」、もう1名は「Comma (コンマ)」と回答し、その理由について「I use these commas in Japanese sentences. (日本語の文でこのコンマを使っている)」、「I know my commas (自分のコンマのことは分かっている)」とコンマであることを主張している。コンマが漢字でないことは不問となっており、またコンマであれば文字の位置が下部であるはずものが中央にあることも考慮に入っていない。

「髪」と回答した者は「Because it looks like a piece of hair (髪の毛みたいだから)」と理由を述べ、意味は「Hair (髪)」、「It literally looks like a piece of hair (文字上髪の毛みたいに見える)」と言う。一つの点を髪の象形文字と捉えたところは興味深い。

「良い質問です」と回答した者は、理由は「I don't know (分からない)」とし、意味は「It's good to be honest (正直になることは良い)」、「We don't know everything (私達は全てを知っているわけではない)」と回答しているが、漢字に哲学的な意味を見出しているのではなくおそらくこの漢字についての回答ではない内容と考えられるのでこれ以上は言及しない。

「すい」と読む理由は「Suiei is swimming (すいはいは水泳)」で、意味は「Rain (雨)」、理由として

「Because it looks like a drop of water(the kanji for water has 3 of those) (水のしずくのように見えるから(水の漢字にはしずくが三つある一ノのことか?))」と記述している。この回答者も髪の回答者と同じように、一面の漢字を象形文字として捉えていることが分かる。

「のいち」と読んだ回答者は、その理由として「I thought that this was the reading because it is titled like the katakana no and looks like the kanji for one too. (そう読むと思った理由は、カタカナのノと漢字の一にも似ているから)」と述べており、意味は「Only one (たった一つ)」、その理由を「I don't really have a reason for using this as the meaning but it has the kanji for one so I added 'only' to it. (これを意味にする理由は特にないけれど、漢字の一は、漢字にあるから「たった」をつけた)」としている。

筆者はときに、漢字一文字の意味に注目することなく音だけで記憶するため、同音異義の漢字の使い分けに困惑する日本語学習者に遭遇することがあるが、この子どもたちは学習途中ではありながら、正解にはたどり着けなくとも表音文字にはない漢字の表意的側面を理解し、あるいは象形文字もあることを理解する力が養われていることが分かる。

最後に、このように初めて見る漢字に遭遇したときにどうするかについてだが、以下ようになった。

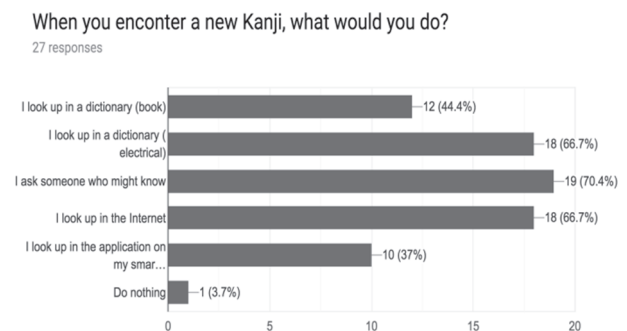


図13 新しい漢字に遭遇したときの対処

複数回答可としている。上から「辞書(紙媒体)で調べる」、「辞書(電子)で調べる」、「誰か知っているような人に聞く」、「インターネットで調べる」、「スマホ

のアプリで調べる」、「何もしない」となっている。一番多かったのが、「知っていそうな人に聞く」で、以下電子辞書とインターネットが同数となった。調べる媒体としては、紙ではなく電子辞書やインターネット、スマホなどデジタルに移行していることが鮮明となっている。

まとめ

ここでは本稿で提示した海外における日本語学習者の調査結果と、日本における外国につながる子どもに対して行った調査結果について以下の4つの点を検討する。

1. 「漢字が好き」あるいは「漢字が嫌い」

今回の調査結果には図6で分かるように「漢字が得意でなくても好きだ」と回答した者の数が「漢字が得意で好きだ」と回答した者よりも多く、得意だから好きであるというような直接的関係は見いだせず、得手不得手に関わらず概して漢字が好まれていることが明らかとなった。これは外国につながる子ども達への調査結果でも「総じて漢字に対しては負の感情はない」¹¹⁾と同様の結果が得られている。また本調査ではひらがなに次いでカタカナではなく漢字が好まれていることも明らかとなっている。

一方で、図8から分かるように、「漢字が得意ではないから好きではない」と回答した4名のうち3名が「書き」があまり得意ではない、あるいは全く得意ではないと回答しており、漢字が好きでなくなる要因は「書き」にあるという傾向が見られた。

漢字が得意でありながら嫌いだと回答した2名は、日本語学習歴3年で、第二言語はそれぞれ日本語と中国語となっており、いずれも漢字を使用する言語である。好きな文字に一名は漢字を挙げており、もう一名はひらがな・カタカナ・漢字3種を挙げています。そのためなぜ漢字が嫌いだと回答したのか、さらなる調査が必要である。

2. 「漢字の書き」と「漢字の形の記憶」について

漢字の「書き」も「漢字の形の記憶」も「まあまあ得意」が最も多く、数も17と18とほぼ同数となっている。「まあまあ得意」が「あまり得意ではない」のほぼ2倍というポジティブな結果となった。

漢字の「書きの得手不得手」と「漢字の形の記憶の得手不得手」について本調査の漢字の「書き」と「形の記憶」を詳細に見てみると、「書き」が「全く得意ではない」と回答した者1名は「形の記憶」は「まあまあ得意ではない」と回答している。また「書き」が「あまり得意ではない」と回答した者9名のうち「形の記憶」について「あまり得意ではない」と回答した者が3名で、「まあまあ得意」が5名、「得意」が1名となっている。そして「書き」が「まあまあ得意」と回答した者17名のうち、「形の記憶」が得意は4名、「まあまあ得意」が13名となっている。つまり、書きについて「全く得意ではない」あるいは「まあまあ得意」と回答した者については形の記憶も同様になっているが、漢字の書きが「あまり得意ではない」という者達のなかでは得手も不得手も混在していて、関係性があるとは言えない。

一方漢字の形の記憶の仕方についてみると、全体的に最も採用されているのは「漢字を覚えるまで何度も書く」であった。しかし漢字の形を記憶することが得意と回答した子ども5名にしぼると、この方法を採用しているのは2名のみで、むしろ4名が漢字をバラバラ、偏と旁に分ける、あるいはフラッシュカードを用いて覚えるという視覚的な方法を採用しているという回答が最も多かった。筆者(2016,2018)では、いくつかの方法を組み合わせて漢字を覚えている大学生や外国につながるの日本在住の日本人のうち、漢字の記憶が得意であるという回答者は「何度も書く」より、漢字を分解して覚える方法を採用していることが明らかとなっており、漢字の形を記憶するには反復的な物理的な動作ではなく、視覚的な方法(ただし眺める

のではなく) が有効であると改めて言えよう。

3. 未知の漢字に遭遇したときの読みや意味の推測

本調査では、「潤」については旁側の門を含んだ他の漢字との混同が見られた。また偏と旁で構成される漢字の音読みは旁から推測されるということを考慮して読みの正解を導き出した子どもはいなかった。しかし漢字から辞書同様の意味を導き出すことはできなかったものの、漢字の構成要素から推測する姿勢が見られ、漢字という文字がどのようなものか理解していることが分かる。

一方、日本にいる外国につながる子どもの場合は、「分からない」と回答した子ども以外は先に述べたように既に知っている漢字「潤」と認識、あるいは形が「潤」と類似しているから「じゅん」と読む様子が見られた。日本語環境にあつて、学校で学習する以外で遭遇する漢字が多いため、またアイドルの名前の一部であるため獲得した漢字なのであろう。ただし既知の漢字と形が似ているため、漢字を仔細に分析することをせず、既存の知識で処理したと考えられる。一方で読みが分からないと答えた来日時期が小学校高学年で日本での修学期間が短い子どもはむしろ旁に注目し、意味は「あいだ」と推測している。¹²⁾ この姿勢は、海外で日本語を学習している生徒達と共通している。つまり、未知の漢字に対しては仔細に観察するということである。

4. 未知の漢字に遭遇したときの対応

本調査の結果から、選択肢を個別に見ると「人に聞く」というものが最も多いが、「調べる」ことでまとめると媒体は何であれ自分で調べることをしている子どもが多いことが分かる。「知っていそうな人に聞く」ことだけを回答した子どもは全体の2名に過ぎず、「何もしない」と回答した子どもが全体で1名しかいないことから、それ以外の子どもは様々な方法で調べることが分かる。

外国につながる子どもの場合、『知っていそうな人に聞く』は少なからずあり…インターネット利用が半数となった。アプリの利用もある。…電子辞書の利用がほとんどなく、これは若年層のスマートフォン普及の影響が大きいと考えられる¹³⁾ となっており、海外で日本語学習する子どもも、日本にいる外国につながる子どもも電子媒体を利用する割合は高いが、従来の紙や電子辞書に限定した場合に、海外の子どもは紙や電子辞書を利用している割合が高いのが特徴的である。

最後に

外国につながる子ども達の来日時期(日本での就学開始期)によって漢字の得手不得手の事情が異なることは先の論文で明らかとなったことであるが、漢字の学習開始時期が彼らと比較的近い海外で日本語を学習する子ども達は、共通点はあるものの相違点もあることが分かった。

共通点としては、先述のとおり漢字が好きではない子どもはそれほどいないこと、漢字が好きではない原因には漢字の「書き」が苦手であることが関係すること、また、漢字の「書き」の得手不得手と「形の記憶」の得手不得手には関係がないこと、漢字は「書き」より「読み」が得意であることである。さらに、未知の漢字に遭遇したときには、漢字を詳細に分析する姿勢も共通している。

しかし、海外で日本語を学習している子ども達は漢字の「書き」について比較的得意としている者の方が多く苦手意識が薄い一方で、日本での就学期間の短い外国につながる子どもは漢字の「書き」についてあまり得意ではなく、さらに先述のように「読み」も苦手であるという点が異なっている。

移民が多く、街自体が多言語環境にあるニューヨークで子ども達自身の多くが多言語であるが、それ故新たな言語習得への気負いやプレッシャーがあまりないこと、「先取り」言語学習の選択の一つとしての日本語

学習という学習者のモチベーションの高さ、日本国内で学習する漢字の数の多さや漢字ができなければいけないというプレッシャーがないことなどが、この漢字の「書き」に対するポジティブな結果の要因になるのではないだろうか。しかし、本稿の調査で対象となった非漢字圏を母語とする多くの子ども達も、日本に在住する非漢字圏の外国につながる子ども達も、漢字そのものに対する意識がポジティブであることを前提にすると、海外における日本語学習者の漢字へのポジティブな反応を、日本で学習する外国につながる子ども達の漢字学習にも期待することはできるのではないかと考える。それには、まず「書き」に対する苦手感を軽減することが必要であろう。そのためにはやはり、漢字を分解することが漢字を覚えるにあたって有効であろう。¹³

先にも述べたが、本稿で調査をしたクラスの子どもの、未知の漢字に遭遇したときに参考にする媒体として紙あるいは電子媒体の辞書を利用している数が多いことも相違点として挙げられる。これについて、日本国内の大学生、あるいは高校生に行った別の調査では紙媒体からインターネットを含む電子媒体へという移行が如実に現れており、今後海外の学習者達にもそのような変化が見られるようになって考えられる。ちなみに、一つの文字を調べるのに手間のかかる紙媒体の辞書と少し楽になる電子辞書の利用による違いについて、漢字の辞書ではないが米崎 (2016) は次のように述べている。

電子辞書において、詳細な解説や例文を検索するのに2次検索が必要なため、紙辞書よりも劣るという主張があるが、今回の結果にも表れている通り、見出し語に到達する時間そのものが長ければそれだけで時間がかかる。また2次検索が必要であるという事実故に電子辞書において詳細な検索をしないかという点、今回の調査結果からはそれも事実ではない。なぜなら、一覧性に優れる紙辞書においても電子辞書と使用方法

が変わらないからである。¹⁴

このように、電子でも紙でも辞書の機能としては変わりなく、媒体が電子になることによって漢字が不得手になるということもないようである。むしろ電子媒体、あるいはインターネット利用によって検索ストレスが軽減されることは確かである。それは、漢字の読みが分からないときには、部首と画数、あるいは総画数を数えて辞書に所収されている漢字のリストから探し出す、あるいは音読みを類推することで音読みのリストから目的の漢字にたどり着くという紙媒体の辞書で用いる過程を、電子媒体では経なくても可能だからである。そのことで気軽に自ら学習するようになることが期待される。

今後の課題としては、漢字の書きが得意な者が採用する漢字を分けて形を覚えるという方法を、漢字の書きが不得意だとする者は採用できない理由があるのか、もしあるとすればそれは何か、あるいは採用することによって不得意から得意に変わるのかを検証することである。

現在「手書き」があまり必要とされなくなりつつある。実際、日本語を母語としない人が受験する JLPT の漢字の問題も書くことは問われず選択式である。また、実生活においても、文化庁の平成 24 年度「国語に関する世論調査」によると、平成 16 年の調査時に比べ、手書きをする機会が減少傾向にあるということである。そのため、デジタル時代以前も生きてきた世代ですら「手書き」に対する自信を失いつつある。¹⁴ 今後デジタル化が進んでいけば、どれだけ正確に書けることが求められるのだろうか。文字が認識さえできればよい時代が来るかもしれない。そのときには漢字の「書き」が不得手なせいで漢字が苦手であるという学習者はいなくなるのかもしれないが、それまでは、漢字が正しく書けるようにならなければならず、そのためのストラテジーは日本の内外で必要とされよう。

註

註1 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部研究開発化が行った平成17年度高等学校教育課程実施状況調査

註2 AP(Advanced Placement)が提供する世界の言語と文化には、中国語と文化、フランス語と文化、ドイツ語と文化、イタリア語と文化、日本語と文化、ラテン語、スペイン語と文化、スペイン文学と文化がある。これらは大学初級レベルとなっており、世界の言語と文化を中等教育でいわゆる「先取り」して学習することができる。

註3 山本(2011)は、日本における小学生の漢字学習に対して「繰り返し書く学習方法が一番相応しいものに見えても、それだけではなく、他の方略の視点を合わせることで、より効果を得られるのではないだろうか」¹⁰⁾と示唆している。

註4 文化庁の平成23年度「国語に関する世論調査」では、平成13年度と比較すると漢字を書く力が衰えたと全世代が回答している。

参考文献

- 1) 藤本陽子(2017)「漢文と漢字学習から見えるもの—外国につながる子どもたちの目線—」『早稲田教育評論』31(1)
- 2) 藤本陽子(2016)「漢文と漢字に対する意識の相関関係および漢字学習ストラテジー」『早稲田教育評論』30(1)
- 3) 藤本陽子(2018)「漢字、漢字学習ストラテジー、漢文学習—高校生を対象に行った調査から—」(堀誠編著『古典「漢文」の教材研究』)学文社
- 4) 文化庁「平成24年度『国語に関する世論調査』の結果の概要」
- 5) 文化庁「平成23年度『国語に関する世論調査』の結果の概要」
- 6) The College Board(2019) AP Courses & Exam Pages

<https://apcentral.collegeboard.org/courses> (2019.9.20)

引用一覧

- 1) U.S. Department of State (2009-2017) Languages <https://2009-2017.state.gov/m/fsi/sls/orgoverview/languages/index.htm> (2020.1.9)
- 2) 藤本陽子(2016)「漢文と漢字に対する意識の相関関係および漢字学習ストラテジー」『早稲田教育評論』30(1),86-89
- 3) 藤本陽子(2018)「漢字、漢字学習ストラテジー、漢文学習—高校生を対象に行った調査から—」(堀誠編著『古典「漢文」の教材研究』)学文社,108-109
- 4) 藤本陽子(2017)「漢文と漢字学習から見えるもの—外国につながる子どもたちの目線—」『早稲田教育評論』31(1),69
- 5) 藤本陽子(2016)「漢文と漢字に対する意識の相関関係および漢字学習ストラテジー」『早稲田教育評論』30(1),88
- 6) 藤本陽子(2018)「漢字、漢字学習ストラテジー、漢文学習—高校生を対象に行った調査から—」(堀誠編著『古典「漢文」の教材研究』)学文社,114
- 7) 藤本陽子(2017)「漢文と漢字学習から見えるもの—外国につながる子どもたちの目線—」『早稲田教育評論』31(1),65
- 8) 藤本陽子(2018)「漢字、漢字学習ストラテジー、漢文学習—高校生を対象に行った調査から—」(堀誠編著『古典「漢文」の教材研究』)学文社,114
- 9) 藤本陽子(2017)「漢文と漢字学習から見えるもの—外国につながる子どもたちの目線—」『早稲田教育評論』31(1),68-69
- 10) 山本由紀子(2011)「小学校の漢字学習から見えてくるもの」(堀誠編著『漢字・漢語・漢文の教育と指導』)学文社,52
- 11) 藤本陽子(2017)「漢文と漢字学習から見えるもの—外国につながる子どもたちの目線—」『早稲田教育

育評論』31(1),64

12)、13) 藤本陽子 (2017) 「漢文と漢字学習から見えるもの—外国につながる子どもたちの目線—」『早稲田教育評論』31(1),66

14) 米崎啓和 (2016) 「電子辞書と紙辞書の比較研

究：検索速度と使用方法について」『中部地区英語教育学会紀要』45(0),117-118

Strategy and the Attitude toward Learning Chinese Characters -Focusing on the Japanese Language Learners in a Japanese Class in New York-

Yoko FUJIMOTO

Abstract: Learning Chinese Characters is not avoidable when learning the Japanese language in Japan or overseas. In Japan, I have been doing research on Japanese learner groups who are currently taking a Kokugo (Japanese literature and language) class, who have taken Kokugo classes in their lives (college students), and are now taking Kokugo as a second language (migrant child).

From the research, I found that the number of learners who like Chinese Characters is greater than the ones who dislike them regardless of their strengths or weaknesses when studying the Chinese Characters. I also found that more learners are poor at writing Chinese Characters but better when reading Chinese Characters. As for their strategies when trying to memorize Chinese Characters, they differ depending on the group; however, the strategy which most people in every group take is to write the characters many times.

In this paper, I did the same research on the Japanese language learners at a high school in New York examining whether they have the same tendency as the Japanese learners in Japan, especially migrant children. As a result, they also like Chinese Characters and use the same strategies when learning to write. However, they have a more positive attitude toward learning Chinese Characters than the migrant children in Japan.